ことばのゆれ

鎌田良二
木下智重子

「愛さない」か「愛しない」か「信じる」か「信ずる」かのように二つの形が並存している場合、これを「ゆれ」という。「ゆれ」と呼びうる事例は多種多岐にわたっているが、もとからある形に対して新しい形が生じて両者が並存しているある時期における現象である。そのうちに一方が消え去ればゆれは解消するという通時的変化の一時期を示すものである。

ゆれには、アクセントのゆれ、動詞の活用に関するゆれ、語形に関するゆれ、音韻変化によるゆれ、表記形式・漢字音によるゆれ、また、類推作用によるゆれなどがある。

本稿では次の四種に分ける。

一　「漢字」の違いによるもの
二　「よみ」の違いによるもの
三　「表記」の違いによるもの
四　「文法上」の違いによるもの

本稿ではこの一・二・三については、『廣辞林』第二版（一九二五年）と『広辞林』第六版（一九八三年）とにより、その語形が出ているものを○印で、出ていないものを×印で示した。

また、Aの語形を使うか、Bの語形を使うかについて神戸市在住者を中心として、神戸市の東隣、西宮市・芦屋市。西隣の明石市在住者を10（十歳代）、20（二十歳代）、30（三十歳代）、40（四十歳代）、50（五十歳代以上）に分け、各年齢層につき十数名から二十数名について調査した。各年齢層の人数は少ないが、こ

れを一応パーセントで示すことにした。各年層の人数が少ないので端数を出さず二捨三入というか、八十三対十七は八十五対十五パーセントという形にした。

本稿の語の選択の段階で、A・Bは別語であって「ゆれ」とするには価しないもの、また、地方性即ち方言差と見るべきであると思われるものもあるがその実態を見るためにあえてここにとり入れることにしたものもある。

本稿の分担は、語の選択は両名で、「辞書」「年齢層」による調査は木下、「考察」は鍬田である。

一　「漢字」の違いによるもの

	A	B
1 彼女はアイキョウがある	愛嬌	―愛敬
2 仕事のアイマに休む	合間	―相間
3 ここの気候はアタタカい	温か	―暖か
4 イケバナを飾る	生け花	―活け花
5 エイチを備えた人	英知	―英智
6 牧場でオウシを飼う	雄牛	―牡牛
7 オオゼイの人の意見	多勢	―大勢
8 人がすみにカタヨる	偏る	―片寄る
9 趣味はカドウです	華道	―花道
10 キショウ価値がある	稀少	―希少
11 店番をコウタイする	交替	―交代
12 負傷者はジュウタイです	重体	―重態
13 幸せを末ナガくお祈りする	長く	―永く
14 朝食にタマゴを食べる	玉子	―卵
15 相手にニクハクして撃つ	肉薄	―肉迫
16 ネンパイの人に聞く	年配	―年輩
17 酒をノむ	呑む	―飲む
18 新しいイショウをつける	衣裳	―衣装
19 イチオウこれで終ります	一応	―一往
20 カンギョを食べる	干魚	―乾魚

〔考察〕

1　古語辞典では「愛敬」の字をあて「あいぎゃう（あいきゃう）」として出ている。『廣辞林』第二版（以下、「廣」または「二版」と略す）にもAはない。

3　気候の場合としてはBであるが「年齢層」にAはいくらか出ている。

7　Aはタゼイとよみ、オオゼイとは読めないのであるが、

〔辞書〕

広	廣		
○	○	A	17
○	○	B	
○	○	A	18
○	×	B	
○	○	A	19
△	×	B	
×	×	A	20
○	○	B	

〔辞書〕の中、○印は「主見出し」としてあるもの、△印は「副見出し」または「補足」としてあるもの、×印は、その辞書の見出しとしてないもの。

広	廣		
○	×	A	9
○	○	B	
○	○	A	10
○	○	B	
○	○	A	11
○	○	B	
○	×	A	12
○	×	B	
○	○	A	13
×	×	B	
×	△	A	14
○	○	B	
○	○	A	15
△	×	B	
○	×	A	16
○	×	B	

広	廣		
○	×	A	1
○	○	B	
○	×	A	2
○	×	B	
○	○	A	3
○	○	B	
○	○	A	4
○	○	B	
○	×	A	5
○	○	B	
×	×	A	6
○	×	B	
×	×	A	7
○	○	B	
○	○	A	8
○	○	B	

〔年齢層〕

才	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B/C	A	B	A	B	A	B/C	A	B	A	B	A	B	A	B
50	90	10	100	0	10	90	80	20	40	60	30	70	30	70	10	90	95	5	60	40	40	60	80	20
40	85	15	95	5	15	85	85	15	80	20	30	70	40	60	30	65/5	100	0	100	0	50	50	65	35
30	85	15	100	0	10	90	85	15	80	15/5	25	75	40	60	35	55/10	100	0	85	15	60	40	60	40
20	95	5	100	0	10	90	95	5	90	10/10	50	50	70	30	30	50/20	85	15	100	0	50	50	65	35
10	80	20	100	0	15	85	90	10	85	5/10	55	45	65	35	35	60/5	85	15	80	20	40	60	80	20

5-C（知らない）　8-C（場合により使い分ける）

才	13		14		15		16		17		18		19		20	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B/C
50	40	60	20	80	40	60	50	50	10	90	75	25	95	5	70	30
40	60	40	30	70	50	50	75	25	15	85	60	40	100	0	50	30/20
30	20	80	25	75	50	50	75	25	25	75	60	40	100	0	60	30/10
20	25	75	30	70	50	50	60	40	30	70	20	80	100	0	65	25/10
10	75	25	35	65	25	75	80	20	30	70	10	90	100	0	60	30/10

20-C（カンギョと言わない）

実際には「年齢層」の表で見る通り若い方でかなり使われている。

9　一見、Bの方が新しいようにも思われるが「二版」ではAはなくBのみである。

11　年齢層調査でもちょうど半々であるからこれがまさにゆれていると言えよう。

12　Bの方が古い用法であるように思うが、現在の新聞ではAである。

13　「年齢層」で見るとBの方が多いが、辞書ではBはない。「永久・永遠」などのエイとよませる字である。「永い間」「永らく」もないことになる。

14　飲食店などでAを用いていることがあるが店での慣用ともいうべきもので、本来はBである。この例文では当然Bであると思うが「二版」にはAも出ている。もっとも「子」に「たまご」の意を含めることもある。

18　「辞書」に見る通り「二版」ではAのみであるが「年齢層」では若い方でBが圧倒的である。AからBに変わろうとしているのだろうか。木下の報告では「結婚式の貸衣裳」となっている広告が多いということである。

20　Aはホシザカナとよむということもあるが、「年齢層」に見る通り、Cの「使わない」がある。当地では、これを「ひもの」と言ってカンギョを使わないということによるものであろう。

二　「よみ」の違いによるもの

	A	B
1 明日来て下さい	あした	―あす
2 馬酔木はツツジ科である	あせび	―あしび
3 早く家に帰る	いえ	―うち
4 依怙地な性格	いこじ	―えこじ
5 人間は自然に依存する	いぞん	―いそん
6 出立の準備	いでたち	―しゅったつ
7 魚を釣る	うお	―さかな
8 大地震がおこる	おおじしん	―だいじしん
9 美しい木立の公園	きだち	―こだち
10 その事に固執する	こしつ	―こしゅう
11 彼の思惑はわからない	しわく	―おもわく
12 戸主との続柄	ぞくがら	―つづきがら
13 粗品ですが	そひん	―そしな

14　地球に存在する生物　ぞんざい　―そんざい
15　その他、ご意見は　た　―ほか
16　手数をおかけいたしました　てかず　―てすう
17　日本で生まれた　にほん　―にっぽん
18　会を発足する　はっそく　―ほっそく
19　便覧の十ページ　びんらん　―べんらん
20　秋の紅葉が美しい　もみぢ　―こうよう
21　四枚目のプリント　よんまいめ―よまいめ

〔考察〕

1　「明日」をミョウニチと音よみすれば、あらたまった形となり敬意を含む文の中に用いられる。アスとアシタもアシタの方がくだけた文に用いられるという傾向があるように思われる。

2　『広辞林』第六版（以下、「広」または「六版」と略す）でアシビはアセビの異称語となっている。

3　この文例では「家庭」という意味になるが、これも地方性即ち方言性があるだろう。「建物」「家庭」「家族（人）」その他「家」の意味内容によってイエかウチかが異なることがある。

5　辞書としてはイソンであるが十代から三十代まで百パーセント、イゾンになっている。辞書にイゾンは△印になっている。

6　和語と漢語の違いで、若い層では漢語の方が好まれるという傾向があるのだろうか。

7　「魚市場」のときのように魚類の総称のときはAで、副食物としてはBとなるのであろうか。

8　Aのオオが訓よみになるためか若年層では殆んどBである。五十歳代はAである。「大震災」となればもちろんダイである。

10　五十歳代ではA、若い層ではAがやや多いがBもかなりの数をしめている。「執―」という熟語で「シツ―」とよむことが多いためであろうか。

11　Bは湯桶よみになるがこれが落着いているのであろう。Aは「思想」などとの関連か。「辞書」には両方ある。

12　そのまま音よみをすればCのゾクヘイとなるがこれは「辞書」にはない。三十歳代以下ではAが圧倒的に多い。四十歳代以上でBが多くなる。

13　「辞書」には両形ともあるが各年層ともBで、高年層に僅かにAがある。

14　一般にはBであるが、木下の調査では『江戸語大辞典』（講談社）ではAのみであるとのことである。

「辞書」にはAはない。

〔辞書〕

広	密		
○	○	A	1
○	○	B	
○	○	A	2
○	○	B	
○	○	A	3
△	×	B	
○	×	A	4
○	×	B	
△	×	A	5
○	×	B	
○	○	A	6
○	○	B	
○	○	A	7
○	○	B	
×	×	A	8
×	×	B	

広	密		
○	○	A	9
○	○	B	
○	○	A	10
○	○	B	
○	×	A	11
○	○	B	
○	×	A	12
○	○	B	
○	○	A	13
○	○	B	
×	×	A	14
○	○	B	
○	○	A	15
○	×	B	
○	○	A	16
○	○	B	

広	密		
○	△	A	17
○	△	B	
○	×	A	18
○	○	B	
○	×	A	19
○	○	B	
○	○	A	20
○	○	B	
×	×	A	21
×	×	B	

〔年齢層〕

r	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12	
	A	B	A	B/C	A	B	A	B/C	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B/C
50	60	40	40	60	90	10	70	20/10	95	5	40	60	20	80	70	30	10	90	100	0	20	80	40	55/5
40	20	80	40	60	100	0	100	0	90	10	50	50	10	90	20	80	0	100	75	25	15	85	35	60/5
30	50	50	25	75	100	0	100	0	100	0	50	50	0	100	10	90	0	100	75	25	25	75	100	0
20	15	85	25	75	90	10	95	0/5	100	0	30	70	10	90	10	90	0	100	60	40	25	75	95	0/5
10	60	40	20	65/15	90	10	90	5/5	100	0	20	80	15	85	10	90	0	100	60	40	20	80	100	0

2 - C (知らない) 4 - C (使わない) 12- C (「ぞくへい」)

r	13		14		15		16		17		18		19		20		21	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
50	20	80	20	80	100	0	10	90	40	60	10	90	60	40	40	60	40	60
40	0	100	10	90	85	15	5	95	85	15	0	100	80	20	40	60	50	50
30	0	100	0	100	100	0	5	95	75	25	0	100	100	0	35	65	50	50
20	0	100	0	100	100	0	25	75	80	20	5	95	100	0	60	40	85	15
10	0	100	0	100	80	20	15	85	80	20	10	90	100	0	60	40	90	10

16　「年齢層」ではBが多くなっている。接頭辞「お」をつけるとAが多くなるのであろうか。

17　切手やスポーツ選手のユニホームはBになっている。A日本書紀・日本酒・日本画。B　日本社会党など。日本大学・日本女子大学など学校名になるとAの方が多いのだろうか。日本橋には東京・大阪に両形がある。ここの文例のようになるとAが多く、五十歳代ではBが多くなっている。「二版」で△印になっているのは「日本」単独では出ていないで、「日本アルプス」などの形で出ている。

19　「辞書」には両方出ているが若い層ではA。高い年齢層にBがいくらか出ている程度である。これには地域差があるかどうか調査したいところである。

20　「秋に葉の色が変化すること」の意である。これを「楓の葉」に限るときと区別することがあるかもしれない。後者の場合はモミヂで、一般に葉が変色するときはBとなることがあるかと思うがどうであろうか。

21　ンの添加とみるか。「四本」「四本目」となるとシの音との関係もできてくるか。

三　「表記」の違いによるもの

		A	B
1	それが一番――	いい	―よい
2	明るい――に行く	うち	―間
3	砂の中に――	うめる	―うずめる
4	――から、雨だ	おとと い	―おとつい
5	――をつくった	おにぎり	―おむすび
6	――を、もう一杯下さい	おひや	―お水
7	この仔犬は――	重たい	―重い
8	ご飯を――に炊く	かため	―かたいめ
9	ご飯を――に炊く	やわらかめ	―やわらかいめ
10	いまだ――なかった	かって	―かつて
11	彼女の――は長い	髪	―毛(髪の毛)
12	昼は――を食べた	(注)カレーライス	―ライスカレー
13	子供の歩き方はまだ――	ぎこちない	―ぎごちない
14	あの人は――	けちだ	―せこい
15	――が目にしみる	けぶり	―けむり
16	冷たい風が吹いて――	さぶい	―さむい

17 秋は何となく――季節だ　さびしい　―さみしい
18 海の水は――　塩辛い　―しょっぱい
19 ――で長さを測る　定規　―ものさし
20 ――の人が来る　親類　―親戚
21 この密柑は――　すい　―すっぱい
22 手紙の最後に――をかく　追伸　―二伸
23 ――を吐く　つばき　―つば
24 ○（まる）と×（――）　ばつ　―ぺけ
25 この服は私に――だ　ぴったり　―ぴったし
26 小石を――　ひろう　―ひらう
27 ――にぶつかってしまった　もろ　―まとも
28 風呂を――　わかす　―たく

〔考察〕

1　C「ええ」は関西方言として使われるものであるが「年齢層」でもこれは少ない。「二版」でAは△印になっているようにAは新しく普及したものであろう。小学校の教科書に、ある時期「みんないい子」として出てからこの言い方が広まったということを聞いたことがあるがどうだろうか。

3　十代を別にして各年齢ともBが多いが地域性があるのだろうか。

〔辞書〕

	広	廣	
1	○	△	A
	○	○	B
2			A
			B
3	○	○	A
	○	○	B
4	○	×	A
	○	○	B
5	○	×	A
	×	×	B
6	○	○	A
	○	○	B
7	○	○	A
	○	○	B
8	○	○	A
	×	×	B
9	×	×	A
	×	×	B
10	×	×	A
	○	○	B
11	○	○	A
	○	○	B
	○	×	C
12	△	×	A
	△	○	B
13	○	×	A
	×	○	B
14	○	○	A
	○	×	B
15	○	○	A
	○	○	B
16	×	○	A
	○	○	B
17	○	○	A
	○	○	B
18	○	×	A
	○	×	B
19	○	×	A
	○	×	B
20	○	○	A
	○	○	B
21	○	○	A
	○	○	B
22	○	×	A
	○	×	B
23	○	○	A
	○	○	B
24	○	×	A
	○	○	B
25	○	○	A
	○	×	B
26	○	×	A
	×	×	B
27	○	○	A
	○	○	B
28	○	○	A
	○	○	B

〔年齢層〕

オ	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12	
	A	B/C	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
50	70	30	90	10	30	70	60	40	70	30	30	70	40	60	50	50	50	50	70	30	55	45	90	10
40	60	40	90	10	40	60	80	20	80	20	30	70	30	70	85	15	85	15	80	20	45	55	100	0
30	60	40	75	25	40	60	90	10	90	10	25	75	20	80	90	10	90	10	90	10	45	55	100	0
20	70	25/5	90	10	30	70	90	10	90	10	30	70	30	70	90	10	90	10	90	10	30	70	100	0
10	90	0/10	85	15	60	40	75	25	90	10	30	70	45	55	90	10	90	10	95	5	20	80	100	0

1-C(「ええ」)

オ	13		14		15		16		17		18		19		20		21		22		23		24	
	A	B	A	B/C	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B/C	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
50	80	20	100	0	10	90	10	90	10	90	70	30	20	80	40	60	60	40	80	20	0	100	20	80
40	80	20	100	0	10	90	5	95	15	85	80	20	25	75	15	85	15	85	100	0	0	100	40	60
30	90	10	50	25/25	5	95	15	85	10	90	60	40	30	70	40	60	20	80	100	0	5	95	40	60
20	100	0	55	25/20	0	100	10	90	25	75	60	40	25	50/25	20	80	15	85	100	0	5	95	50	50
10	100	0	40	60	0	100	10	90	30	70	55	45	30	50/20	25	75	0	100	100	0	0	100	75	25

14-C(場合によって使い分ける)　　19-C(別物である)

オ	25		26		27		28	
	A	B	A	B	A	B	A	B
50	90	10	40	60	10	90	90	10
40	90	10	45	55	40	60	100	0
30	65	35	25	75	40	60	75	25
20	80	20	35	65	60	40	75	25
10	60	40	25	75	75	25	70	30

4　「一昨日」は「遠津日（をちつひ）」からの音韻変化（頑行同化）であるとBの方がもとの形に近いことになるから「二版」ではBしか出ていない。各年齢とも現在ではBが少なくなって来ている。Bが古く次第にAになろうとしているのだろうか。

5　「握る」と「結ぶ」であろうが、「辞書」にはBはない。しかし、『江戸語大辞典』にはAはなくBのみが出ている。各年齢ともAが多い。

6　女房詞から来たAと、わかりやすい表現としてのBとであるが各年齢ともBが多い。

7　次の8・9とともに地域性があり、調査地点の神戸市ではAの方が古くから使われていたと思っていたが、今回の「年齢層」では各年代ともBが多くなっている。

8　「高め」「低め」「長め」「短かめ」のように形容詞語幹に「め」がつくのであるが、関西では「ちょっと、かたいめにしといて」などと言うことがある。これが次の9とともに少なくなってきていることがわかる。

10　本来Bであるが年齢が高くなるほどAが多くなっている。

11　Cとして「髪の毛」の形がある。

12　われわれ古くはBを言っていたと思うが、最近、店で見るメニューはすべてAである。一時、冗談でAとBとの違いを言い合った覚えがあるが、あの頃がBからAに変化する時期だったのであろうか。「年齢層」では五十歳代に僅かBがあることになっている。

13　『日本国語大辞典』（小学館）では「ぎこつ」「ぎごつ」「きごつ」の三通りの見出しがある（木下）。「辞書」の「二版」即ち大正時代にはBのみ、「六版」の新しい方ではAのみとなっている。「年齢層」でも若い方ではAのみ、高い年齢でBがあらわれてきている。

14　Bの本来の意味は、悪いとか下手とかの意で、役者、寄席芸人の間で使われていたことばである（木下）。若い年齢層でCの「使い分ける」がある。

15　「物体が燃える時に出る気体」で「気振り」「気降り」だから本来Aであったと考えられる（木下）。b—mの交替によるものである。Aは高い年齢層になっている。

16　「二版」では両形が出ているが、一九八三年の「六版」にはBのみである。「年齢層」でもBが多い。

17　「辞書」には両形あるが「年齢層」ではBが多い。

18　地方性があるように思う。調査地点の神戸市でBはあまり使わなかったと思うが若い年齢でBもかなり多くなってきているようだ。

19　Cの「使い分ける」があるように、「三角定規」に対して、棒状のものを「ものさし」ということがある。

20　これは「使い分ける」がないが、Bの方がいくらか改った場合という感覚がないだろうか。しかし、「年齢層」ではBの方が多くなっている。

21　これも18と同じように地方性があるのではないだろうか。神戸ではBの方が新しいようにも思う。「年齢層」でも五十歳代ではAが多くなっている。十歳代ではAがなくBのみである。

24　地域性がある。関西ではBであった。Aは最近入って来た言い方である。「年齢層」でもそれがわかる。

25　新しい「六版」には「俗で」使うようになっている。ヤッパリ――ヤッパシということがあるように「ラ行拒否」の一種と見る。

26　a―o変化であるが「辞書」では「二版」にはなく、新しい「六版」にAのみが出ている。

27　「正面に」の意である。若い層ではAが多く、高い年齢層ではBが多い。これもことばの変化である。

28　「年齢層」で各層ともAが多いが、若い層でBが次第に多くなってきていることがわかる。「ご飯をたく」「大根を煮る」などが、両方とも「たく」とか、「にる」とかなどの区別も調査すればよかったと思っている。

四　「文法上」の違いによるもの

	A	B
1　ここは――	訳しない―訳さない	
2　海は――、空は青い	きれいし―きれいだし	
3　別――人に聞いて下さい	の　―な	
4　私はこの漢字を――	読まれる―読める	
5　そこから――	出られる―出れる	

〔年齢層〕

	1		2		3		4		5	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
50	10	90	80	20	40	60	20	80	80	20
40	0	100	60	40	85	15	10	90	85	15
30	0	100	40	60	85	15	0	100	85	15
20	0	100	40	60	75	25	0	100	75	25
10	5	95	40	60	90	10	0	100	55	45

〔考察〕

1　本稿冒頭に記した「愛しない」「愛さない」と同様にサ変動詞か、五段動詞かの違いである。「年齢層」に見られる神戸を中心とした地域では五段活用のBが圧倒的に多いことになっている。

2　神戸など関西に多い言い方であるが、語幹が「イ」で終る形容動詞、特に「綺麗」を形容詞のように活用させることがある。「美しく」の意で、「キレク」などと言う。形容詞からの類推である。「高いし」「低いし」はよいが、形容動詞の語幹に「し」をつけることはない。「静かし」とはならない。誤りである。ところが各年齢層ともある。Bがダとなっているが、これをヤにして「きれいやし」とすれば結果は変わっていただろうか。

3　「年齢層」でAが多い。ただ、五十歳代ではBが多くなっている。「大きな箱」「大きい箱」などの別はどうか。また、木下の調査で、「おかしな話」「おかしい話」も行なったが、変な話の意で「おかしな話」に対し、「笑うべき話」で「おかしい話」を使うという内容の違いがあることなどから本稿ではこれを省いた。

4　可能助動詞「れる」をつけるか、可能動詞を使うかである。Bが圧倒的に多い。

5　Aが正しく、Bは誤用であるが最近多くなっている用法である。最近多いと思っていたが、「年齢層」調査では意外に少ないことがわかった。

木下の調査では、さらに多くの語があったが本稿の枚数制限からこれを省いた。

（注）三―12に関して市川孝著『新訂　文章表現法』に引用された花森安治氏の文がある。

ライスカレー。
カレーライス。
カリーエンドライス。

つまりは、飯の上にカレー汁をぶっかけて食うのだが、名前に三通りある。

みるからに黄色くて、めりけん粉がどたっとしていて、肉はあまり見あたらない、たまにそれらしいとおもうと、スジだったり、アブラだったりする、これがライスカレー。食うときは、おおむねソースをぶっかけて、ぐちゃぐちゃとひっかきまわすと、うまい。

これがカレーライスとなると、カレーの色もすこし茶色がかって、肉や玉ねぎ、じゃがいもも、所在がハッキリし、福神漬のほかに、らっきょう、紅しょうがなどもついてくる。たべ方としては、一度にこねまわしたり、ソースなどはかけず、端からすこしずつ、汁と飯を合わせて口へもってゆくのが作法である。ふつう、レストランなどで出す。

カリーエンドライスとなると、汁と飯がべつべつに運ばれてくる。その飯をサラにほどよくとりわけ、汁をほどよくかける。薬味としては、さらに粉チーズ、刻みピクルスなどもつく。いただき方としては、スプーンをカチャカチャいわせず、飯をほおばったまま、しゃべらず、ネエサン、水くれ、などとは叫ばないのが作法とされている。(『朝日新聞』の「暮し寸評」)

一般に古い呼称ほど品位が下がるということがある。ライスカレーは「年齢層」でも古くなっている。ライスカレーは「食う」、カレーライスは「たべる」、カリーエンドライスは「いただく」となっているところからもライスカレーよりもカレーライスの方が品位が上であることをあらわしているところがおもしろい。